
星空の約束

* 真央 *

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星空の約束

【Nコード】

N2872Z

【作者名】

真央

【あらすじ】

紗奈は3年前まで一緒にいた雅人を日々探し求めている。

キミはどこにいますか？

ここにキミがない。(前書き)

連載の恋愛をかくのは

苦手ですが

精一杯がんばります。

ここにはキミがない。

あの中2の夏、

キミと一緒に星空を見上げた。

また一緒について約束したよね？

どうして私の前から消えちゃったの？

”また連れてってあげるよ”

そうだったのは嘘ですか？

私はいつまでキミを待てばいいんだろう・・・。

私はキミを信じて・・・信じて・・・
もう3年の月日が流れたよ。

それでもキミという存在を
忘れられない。

深津 ふかつ
雅人 まひと

×

山岸 やまがし
紗奈 さな

キミは、いつか戻ってきますか？

私に・・・笑いかけてくれますか？

ここにキミがない。(後書き)

どうでしたか？

よかったら感想下さいっ

改善できるよう

努力しますっ

過去の想いは切り裂けない。(前書き)

遅くなりましたっ

過去の想いは切り裂けない。

「明日から高校2年かー．．．。」

私は桜散る中1人で
ぼそりとつぶやいた。

今は春休み。

もう高校1年は終わり
次の学年に移るとい
うのに
なんで．．．

こんなにも雅人を
探し求めているの
かな．．．。

雅人は一体
何で私の前から
姿を消したの．．．??

あの時・・・
声をかけていたら
何か変わっていたのかな・・・？

中学2年、夏。

帰り道
私は雅人を呼び止めた。

「雅人ー！！」

「ん？どうした、紗奈。」

「今日花火あるんだって！！」

「ふーん・・・行きたいの？」

雅人は
にこにこ笑っている。

「意地悪・・・／＼／」

「ふふ 俺にとっては褒め言葉だし。
で？どうなの？行きたいの？」

「当たり前じゃん!!
行きたいよ。」

「おっけー

じゃあ午後7時に待ち合わせね。」

「わかった!!
じゃあね」

そういつて別れた私達。

私はワクワクした気持ちを
隠しきれずに
頬が緩んでしまう。

「えへへ・・・//」

こんなにも
楽しみなのは雅人とだったから。

でもあれは
何かおこる予兆だったのかな。

ねえ
・
・
雅人？

過去の想いは切り裂けない。(後書き)

なんかよくわからないことに
なっていたらすみませんっ(汗)

切なげに微笑む君は傳げに散る予兆。(前書き)

早め更新ですっ

切なげに微笑む君は傳げに散る予兆。

「待った？」

「ううん 雅人を待ってる間も
なんかワクワクしてたよっ。」

「そっか。」

雅人は少し照れながら
ふっと笑みをこぼす。

「じゃ、行くっ。」

「うん……」

2人で手を繋いで
私は雅人に引かれるまま
ついていく。

でもその向かう先には
公園しかみえない。

「どこ行くの？」

私は花火がみれない違うどこかへ
行くのかと心配になった。

「ん？公園だけど？」

「あ、そうなんだ・・・。」

ほっと息を漏らす。

「どこかへ行くとても思った？」

ふっと切なげに笑う。

「え．．．？」

「心配しなくても
俺はどこにも行かないよ。」

そういつて雅人は微笑んでるのに
なぜか寂しそうにみえたのは
私の気のせい．．．だよな？

「さあ、行くよ。」

「うん。」

少し心掛かりになりながらも
私達は公園に向かった。

切なげに微笑む君は傳げに散る予兆。
(後書き)

必死に恋愛つぱくしよつと
頑張り中です(笑)

消えた華、消える言葉、今あり続ける私達。(前書き)

遅くなりましたっ

なんかシリアスっぽい??

消えた華、消える言葉、今あり続ける私達。

「わぁ・・・綺麗・・・／／／」

「でしょ？穴場だったんだ。」

私達は公園の芝生に座り込む。

ドーンと大きな音を鳴らし
鮮やかな華を咲かす。

赤、ピンク、緑、青・・・。
色んな華が夜空を照らしている。

「すごいね・・・／／／」

「だな。すっごい綺麗だ．．．。」

少し感傷に浸る。

そんな思いから

1つの疑問が浮かんだ。

来年の夏もまた雅人と

花火みれるかな？

って。

「ねえ、雅人。」

「ん？」

「また、来年も一緒に来てくれる？」

雅人は私の疑問に目を見開く。

「．．．ああ。」

ゆっくりとその表情は微笑みに変わった．．．けど

なんだか違和感があった。

何だろう……。

「心配するな。また、来よう。」

「うん……。」

私達が話している間に鮮やかな華達は
儂く消えていった。

「あ……花火終わっちゃった……。」

「ほんとだな。でも、まだ楽しみはあるから。」

「え……？」

「ま、ここで寝転がってみて。」

「え……？」

「じじいって……芝生で？」

「まあいいからさ。」

「うん．．．？」

意味も分からず言っただけのままに寝転ぶ。

すると雅人は何故かカウントダウンしだした。

「5、4、3、2、1．．．。」

「え？」

訳も分からず戸惑い
横にいる雅人を見つめる。

「ほら、夜空見て？」

「え．．．。」

雅人から目を離して上を見上げると
夜空には星が降ってきた。

「何これ．．．？」

「流星群。」

「へ．．．？」

「流れ星みたいなものだよ。」

「そうなんだ．．．。」

降ってきてはすぐに消え
また降ってくる。

消えても消えても現れる。

「流星群はすごいよね。」

「え？何が？」

確かに降る量がすごいけど．．．。

「消えてもまた降ってきて

俺らの前に現れる。」

「ああ、そうだね。」

「消えているのにまた姿を現すのは
すごい勇気があるはずなのに星には簡単なのかな。」

．．．簡単かな．．．？

「うーん．．．私は簡単じゃないと思うけど
一生懸命だからいいんじゃないかな。」

「そっか．．．。」

でも何でそんなこと
思ったのかな．．．。

何で．．．？

今思えばそれが
私に残した言葉だったのかな。

消えた華、消える言葉、今あり続ける私達。(後書き)

頑張리中ですっ

あ、明日で学校終わりだb

ヤッタネ(ニヤリ)

愛しい君の心の中に触れられない。(前書き)

遅くなりましたっ！

甘さ要素を詰めてみました(笑)

愛しい君の心の中に触れられない。

「そろそろ行くか。」

「うん。」

雅人が声をかけたのは夜空の流星群を見つめて
30分ほど過ぎた頃だった。

「あ、のさ。。。」

「ん？なあに？」

雅人は言いづらそうに口を噤む。

「写真、をさ、撮りたいんだけど。。。」

「いいよ?」

雅人にこんなこと言われたのは初めてだったので快く承諾する。

「じゃ写メで。」

「おっけー」

「3・2・1・・・。」

パシャッと携帯が音を鳴らす。

あ・・・すごく珍しい・・・。」

「何さ・・・? / / /」

「雅人が照れてる・・・。」

「っ・・・ / / / だ、だめなの?」

「いや、可愛いなって」

雅人は顔が整っていて
かつこいいからなあー・・・。

なんで私が付き合えたのかも
不思議なくらいだし。

うーん・・・。

私が頭に疑問符を浮かばせている間に
唇にあたたかいものが触れる。

「ま、雅人？」

「もう一回・・・。」

何回もの優しいキスが降ってくる。

「好き・・・大好き・・・紗奈・・・。」

雅人は抱きしめながら
か細く囁く。

「私も雅人が好きだよ．．．。」

夜空の下で”好き”の言葉を伝えあう。

「今日は楽しかった？」

「うん。特に夜空　すごく綺麗だった．．．。
また来年も来たいな。」

「そっか。じゃあまた連れてってあげるよ。」

「ほんと？」

「ほんと。じゃ帰ろうか。」

「うん」

私は無邪気に笑みを零した。

ただ純粹に雅人と約束出来たことが
嬉しかった。

嬉しかったよ。すごく．．．すっごく．．．。

私達は帰りもまた手を繋ぐ。

帰りはただ

たわいのない話をして笑ってた。

私は話しながら幸せそうに笑ってたんだ・・・。

「じゃばいばい。」

私は雅人に手を振る。

「・・・ん。ばいばい。」

私は家に入ろうとした瞬間

雅人に呼び止められる。

「紗奈!!」

「雅人？」

「俺のこと・・・好き？」

「・・・？好きだよ？それがどうしたの？」

「そっか。じゃあばいばいっ！」

「うん？ばいばい。」

何が言いたかったんだろう？

ずっと悩んだ。

今でもその真理はわからない。

教えてほしかった・・・。

雅人は何が言いたかったの？

愛しい君の心の中に触れられない。(後書き)

そろそろ過去編終了ですかね??

君は言葉と同様に消え去った。(前書き)

さあ章がかわります(笑)

君は言葉と同様に消え去った。

学校に行くときは雅人と行くのに

今日の朝は雅人がいなかった。

「ん？なんでだろう・・・？」

基本遅れない真面目な性格なのに・・・。
風邪かなあ・・・？？

不思議に思いながらも学校に向かう。

10分後くらいたった頃、学校に着く。

「おはよ
」

クラスメイトから声がかかる。

「おはよー！
」

クラスに入って周りを見渡しても
やっぱり雅人は来ていない。

「雅人は？
」

「んー？いないねー。一緒に来なかったの？」

「う、うん。
」

何でだろ・・・。

なんだか胸騒ぎがする・・・。

「はい。座って。」

担任から声がかかる。

もうそんな時間・・・。

雅人は風邪かなあ・・・??
後でメール送ろうかな。

「今日はみんなにお知らせがある。」

急に重い口調で話しだす担任。

何だろうと耳を傾ける。

「今日急に転校した人がいます。」

転校・・・???

誰だろう。

こんな時期にいなくなるなんて・・・。

「それは・・・。」

そこから聞いたものは
信じがたい言葉だった。

「クラスメイトの深津雅人くんです。」

「・・・え？」

私はふいに言葉が漏れた。

だってありえない人が担任の口から
でてきたのだから。

君は言葉と同様に消え去った。(後書き)

いなくなりました(笑)

不安と想いはただ静かに積もりゆく。(前書き)

遅くなりましたっ(笑)

不安と想いはただ静かに積もりゆく。

「どうしましたか？山岸さん。」

担任の声が聞こえてくる。

私はただぼーっと放心状態に陥る。

「山岸さん？」

こんなこと聞いてなかった。

雅人は昨日まで私のそばで・・・横で
微笑んでいたのに・・・。

「何で・・・？」

ふいに口から漏れる。

「いや、私も今日聞いたばかりですので
よくは知りません。」

担任は律義に返事を返してくれる。
けど私は頭に入っていない。

昨日にそんなこと聞いてない。
何で・・・何で・・・私に言ってくれないの・・・？

私は彼女じゃないの・・・？

何で・・・っ・・・。

「何で！...！」

「え！？山岸さん！？」

私は教室から出て走っていく。

ただがむしゃらに、無我夢中になって。

雅人を探しに行くんだ。

ただその思いだけで。

私は走りだしたんだ。

不安と想いはただ静かに積もりゆく。(後書き)

ああいなくなりましたね(笑)

零れる涙はすべて君へのもの。(前書き)

シリアスですねー。

零れる涙はすべて君へのもの。

雅人の家の前につく。

「しほっ・・・はあはあ・・・。」

喉が渴くし汗は流れる。

当たり前だ。だって夏なんだ。

そんなことさえ無視してでも
とにかく雅人に会いたかった。

ピンポンとチャイムがなる。

なのに
誰も出てこない。

「雅人．．．？いないの．．．？ねえ．．．雅人！！」

誰もいない道中で大声をあげる。

迷惑だと思っけど今はそんなこと気にならなかった。

「雅人！！雅人！！雅人！！雅人！！雅人！！雅人！！雅人！！」

ただ泣きながらがむしゃらに
雅人の名前を呼び続けた。

そこで視界は真っ暗になった。

「ごめん・・・。」
置いていってごめん・・・。
紗奈、大好きだったよ・・・。」

そんな声を残して・・・。

零れる涙はすべて君へのもの。(後書き)

暗すぎて暗すぎて
暗すぎて暗すぎて
うちのモチベーションも下がる(笑)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2872z/>

星空の約束

2011年12月29日16時52分発行